1. はじめに

日本の織田羊産業は、明治初期にはしめられが失敗に終わり、その後しばらく国による育成事業は行われなかった。ところが、第一次世界大戦の影響で羊毛の輸入が困難になったことから、軍用目的のために牧羊の奨励政策が始まった。大正7年、農務省農務局に織田課が設置され、全国で五つの国立織田羊場が設けられた（表1）。こうして百万頭増殖計画が立てられたが、大戦後の反動恐慌の影響で、国による織田事業も昭和初期に縮小され、旧月寒織田羊場だけが「国立織田」に改称し、存続することになった。一方、同局の府庁舎については実測調査が行われており、昭和4年に再建された庁舎について報告されているが、近年になって取り崩された。管見のぞき見ではあるが、本稿で取り上げた旧国立友部織田羊場（以下「旧友部織田」）の庁舎は、大正後期のわずかな期間だったとはいえ、日本における織田導入期の唯一の遺構だと考えられる。一方、マンサール（ハンプル）式織田舎の導入という観点から一連の研究が報告されている。大正期の織田事業について多くの新しい見解が見出されているが、旧友部織田鎂舎については管見経緯の概要がふれられているにすぎない。

本研究では、友部織田羊場の設置から移管までの経緯について現存する旧鎂舎の解体も含めて精査するとともに、その建築的特徴を明らかにすることを目的とする。友部織田羊場の設置・移管経緯については「茨城県織田鎂舎要覧」等の文献史料をもとにして詳しく、旧鎂舎の建築的特徴については実測調査をもとに分析を行うこととする。なお、実測調査は平成17-18年度に行われた茨城県近代化遺産総合調査をもとに補正調査を実施したものである。

2. 友部織田鎂舎の設置から移管までの経緯

友部織田鎂舎は、国による織田事業の一環として大正7年7月6日に設置された。だが、織田事業が縮小されたこともあり、設置からわずか数年後の大正13年12月15日に廃止され、大正15年3月31日をもって茨城県織田鎂舎（昭和34年4月に茨城県畜産試験場と改称）に移管された。なお、現存する友部織田鎂舎もこのとき払い下げられ、昭和55年5月末まで鎂舎として使用された。その後、文書の保管庫等として使用されていたが、平成12年に茨城県畜産試験場が石岡市に移転したこともあり、現在は老朽化したまま放置されている。なお、保管されていた文書（1,144点）は、「茨城県畜産試験場保存文書」として茨城県立歴史館に移管されている。

友部織田鎂舎が設置からわずか数年で払い下げられたこともあり、建築図面等は発見されておらず、現時点では鎂舎の施設にかかわる史料は限られている。したがって本稿では、払下げ申請に関する書類等と払下げ直後の「茨城県鎂舎要覧」（各年度版）をもとに友部織田鎂舎の

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1 農務省織田鎂舎一覧</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>名称</td>
</tr>
<tr>
<td>浄川鎂舎</td>
</tr>
<tr>
<td>月寒鎂舎</td>
</tr>
<tr>
<td>旧日織田</td>
</tr>
<tr>
<td>坂本鎂舎</td>
</tr>
<tr>
<td>明州鎂舎</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*農務省筑波病院「茨城県鎂舎要覧」（昭和34年版、昭和42年）、半尾数は大正19年4月末 | 数値（神戸新聞社（大正19年11月29日）による。)

*1 島根大学総合理工学部 准教授・博士（都市・地域計画）（〒 690-8504 島根県松江市西川津 1060）
*2 青山学院大学専門研究員・修士（都市計画）
*3 青山学院大学大学院教授・博士（社会工学）
*4 青山学院大学大学院教授・博士（社会工学）

Shigeo NAKANO --- 1 Shin NAKAJIMA --- 2
Masahito FUWA --- 3 Yusuke KOYAMA --- 4

The purpose of this paper is to clarify the architectural feature and background of the removing and reconstruction about former government office of Tomobe national sheep farm. Tomobe national sheep farm was one of five sheep farms instituted by Agriculture Department in Taisho era. That government office may be the only building of former national sheep farm in existence. That government office was removing from Hojyo national sheep farm and reconstruction. That office has been conservation since that time.

Keywords:
Tomobe national sheep farm, Government office, Sheep farming, Livestock experimental station

中野茂夫 --- 1 中島伸 --- 2
不破正仁 --- 3 小山雄資 --- 4
施設についてみていくことになる。なお、前者は公文書であり、後者は公的な機関である茨城県畜産場が各年度に発行した要覽であることから、史料としての信頼性は高いと判断される。

払下げ前の友部種羊場の施設をまとめた一覧表が表2である。この表から友部種羊場から27棟の建物が払い下げられたことがわかる。銅鉢コンクリート造のサイロを除けば、すべて木造の建物だったことがある。「茨城県畜産場要覧」（昭和12年度版）には、移管についてつぎのように記されている。

大正13年末元国立友部種羊場廃止セレレクノ路へ移転ノ議

大正13年末元国立友部種羊場廃止セレレクノ路へ移転ノ議

起立同場建物ノ倉ノ数ヲ積価ニ払受ケ畜舍等ヲ夫レ夫レノ用途ニ改築シ

このことから友部種羊場の廃止ノ建物が払い下げの対象になったと推定される。なかでも友部種羊場の庁舎、講堂、小倉室といった管理施設にかかわる施設はほとんどそのままの用途で払い下げられていることがわかる。また官庁等級が変更されているものの、大きな変更はなかった。官庁は、すべて木造平屋建てであり、移管前の第一、第二甲号官舎と第四丙号官舎が一戸建て、第一、第二丙号官舎が二戸建てであった。定築舎は、移管前の第二、第三定築舎が五戸建て、第四定築舎が二戸建てであった。

一方、 хр羊舎は、大正11年度に第十五回舎舎が建設されていることから、少なくとも10棟以上存在していたと推察されるが、移管されたのは第二、第三、第五、第九、第十五回舎舎の5棟だけであった。前掲「茨城県畜産場要覧」には、つづけてつぎのよう記されている。

大正十五年三月三日ヲ以テ正式ニ移転ヲシ、移転後次第ノ畜舍ヲ他ノ増築、移築、改築等ノ内ヲ整備シ、種牛、種牝ノ飼養設備ヲ拡張シ、更ニ大正14年度後半ヨリ養鶏設備ヲ為シ昭和3年度ヨリ数次ヲ拡張シ

このことから、種畜動物が羊から牛、豚、鶏の飼育に変更されることになり、それにともない種羊場の設備を増築・移築・改築していったことが解る。前掲「茨城県畜産場要覧」には、昭和12年度当時の建物について以下のように記されている。

庁舎講堂小倉室物置等附属物6棟、牛舎2棟、豚舎4棟、鶏舎及びその関係建物1棟、豚肉加工場1棟、製乳所、既舎、農具舎各1棟、厩

表2 友部種羊場の移管前後の建物一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>畜産場施設（移管前）</th>
<th>畜産場施設（移管後）</th>
<th>建築年度</th>
<th>施設名</th>
<th>施設名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>課長*</td>
<td>課長</td>
<td>木造平家・平仮舎</td>
<td>27.75</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>受領長*</td>
<td>受領長</td>
<td>木造平家・平仮舎</td>
<td>30.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小倉*</td>
<td>小倉</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>17.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第二甲号官舎</td>
<td>第二甲号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>10.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第一甲号官舎</td>
<td>第一甲号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>41.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第一丙号官舎</td>
<td>第一丙号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>39.20</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第三丙号官舎</td>
<td>第三丙号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>100.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第二丙号官舎</td>
<td>第二丙号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>40.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第二丁号官舎</td>
<td>第二丁号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>52.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第二十号官舎</td>
<td>第二十号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>13.75</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>訪問*</td>
<td>訪問</td>
<td>木造平家・生子仮舎</td>
<td>8.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>牛舎*</td>
<td>牛舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>21.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第二仮舎*</td>
<td>第二仮舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>4.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第三仮舎*</td>
<td>第三仮舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>38.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第四仮舎*</td>
<td>第四仮舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>47.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>搾油舎*</td>
<td>搾油舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>139.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第九用舎*</td>
<td>第九用舎</td>
<td>木造平家・生子仮舎</td>
<td>130.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>藻場及倉庫</td>
<td>藻場及倉庫</td>
<td>木造平家・生子仮舎</td>
<td>85.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第二甲号官舎</td>
<td>第二甲号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>30.75</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第四丙号官舎</td>
<td>第四丙号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>16.07</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第三定築舎</td>
<td>第三定築舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>47.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第四定築舎</td>
<td>第四定築舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>22.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第五十号官舎</td>
<td>第五十号官舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>100.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>落合*</td>
<td>落合</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>45.53</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>牛舎附属物舎</td>
<td>牛舎附属物舎</td>
<td>木造平家・生子仮舎</td>
<td>19.50</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>試験舎</td>
<td>試験舎</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>22.00</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>豚肉加工場</td>
<td>豚肉加工場</td>
<td>木造平家・人造スレート葺</td>
<td>45.53</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

図1 茨城県畜産場「建物配置図」

・茨城県畜産場「建物配置図」（昭和12年度版）
図2 「農商務省友部種羊場略史」（大正12・13年頃）
筆者所蔵絵葉書。大正12年3月〜大正13年12月に撮影と推定。

肥宅二棟、飼料倉庫、釜場柵等舎内各棟一棟、職員官房四棟六戸分、
厩舎建物は三棟十二戸、牛舎建物等計四十一棟、總合坪を五百五十七坪四・延坪千八百二十一坪八十六、外サイロ、井戸家形物
置、廊下等小建物及び工作物配列絵図総合効果千五百余坪、延坪八百余坪り

図3 茨城県種畜場略史（大正15年頃）
茨城県種畜場「茨城県種畜場要覧」（同発行、1926.3）

「この種畜場に関しては、払い下げのときに取り壊されているこ
とから、建物詳細は不明である。ただし、現存する庁舎と並
んで配置されていたことから、図2の前後の建物がそれに該当してい
ると推定される。

その後、移築されてきたのが、現存している庁舎ということになる。
こうした経緯もあって、私下に説明者の話しなくは「第二庁舎」
と記述しているのもある。これまで移築元は、大正12年1月31日に
廃置された北条種羊場とされているが、農商務省七草原種牛牧場（明
治33年設置・広島県）という説も伝えられており、ここでは再検証し
ておきたい。

友部種羊場庁舎の移築に関して、公式文書として残されている記録
は、大正12年12月29日の「官報」に掲載されたつぎの公告である。

一、友部種羊場庁舎（元北条種場所）移築外三棟工事
二、入札手続・契約心得・設計図等ノ示場所 友部種羊場
三、入札並開札 大正十三年一月八日午後一時半当場ノ入札、即時開
札、但シ懸賞ノ入札ヲ從ハズ
四、入札保証金 各自見積額百分ノ五以上（円未満切上げ）
五、現場管理 大正十三年一月四日兵庫県加西郡都辺村元北条種羊場
（建物解体ノ場所）及友部種羊場内（随時）
六、入札者資格 大正十一年四月大蔵省令第三十三号ノ依ル資格ル

大正十二年十二月二十九日
茨城県西茨城市各戸町 友部種羊場

表3 旧友部種羊場庁舎略年表

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>事項</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大正7年6月</td>
<td>友部種羊場設置</td>
</tr>
<tr>
<td>大正8年11月6日</td>
<td>北条種羊場産（移築前の庁舎）着工</td>
</tr>
<tr>
<td>大正12年1月31日</td>
<td>北条種羊場の廃止（移築前の庁舎使用停止）</td>
</tr>
<tr>
<td>大正12年12月29日</td>
<td>友部種場移築工事の入札公告</td>
</tr>
<tr>
<td>大正13年1月4日</td>
<td>移築工事の現場開設（於北条種羊場）</td>
</tr>
<tr>
<td>大正13年3月3日</td>
<td>友部種場移築工事竣工（第三庁舎として使用）</td>
</tr>
<tr>
<td>大正13年12月15日</td>
<td>友部種羊場廃止</td>
</tr>
<tr>
<td>大正15年3月31日</td>
<td>友部種羊場移築ハ下（庁舎として使用）</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和5年5月31日</td>
<td>庁舎として使用停止（文書保管庫として使用）</td>
</tr>
<tr>
<td>平成12年</td>
<td>友部種場廃止（建物の使用停止）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1103
工事請負入札
一、友部種羊場庁舎（元北条種羊場所在）移築外三廻工事
もって願いを摂る希望のものは十二月二十九日の官報を読むべし
大正十三年一月二日 茨城県西茨城郡穴戸町 友部種羊場

これら入札に関わる史料から、友部種羊場庁舎は本条種羊場
から移築されたときに間違いないさそうである。友部種羊場庁舎の
移築は、大正十二年十二月二十九日の官報で公告され、翌年一月四日に現地説明、
1月8日に入札が予定されていた（表3）。急なスケジュールである
が、同庁舎が大正十三年三月三十日に竣工していることから逆算してみると
と、「官報」の回数通りに工事担当者が決定され、3月末日までに移

図4 旧友部種羊場庁舎一階平面図
図5 旧友部種羊場庁舎二階平面図
図6 旧友部種羊場庁舎正面立面図
図7 旧友部種羊場庁舎側面（東側）立面図
図8 旧友部種羊場庁舎側面断面図（A-A'）
図9 旧友部種羊場庁舎外観写真（背面・西側側面）
築工事が完了したとすれば、日程的な整合性もとれている。

廃場後の旧北条種羊場については、『加西郡誌』にて「仏盛野は久く荒廃せり散落されてあった」と記されていることから、場内内の施設は完全に失われていたことが推測される。ちなみに旧北条種羊場の他の施設は、熊本種羊場に移築されていることから、移築後の状況にも顕著はないと。

一方、焼却原種牛牧場は、広島県亀山市七塚原分場として払い下げられ、何度か改組を経ながらも現在まで存続されており、しかも明治34年に建てられた旧畜舎再建築（現地焼却記念館）が現存していることから、ここが移築元である可能性は低いと考えられる。

ところで、前掲『加西郡誌』にて、「農商務省北条種羊場は、幾多の経済学を経て遂に大正八年十一月設計、仏盛野で起工式を挙行したのであった」と記されていることから、移築前の標地は大正8年11月6日に着手した建築物であったことがわかる。この施設の竣工月日は不明だが、大正12年1月31日に北条種羊場の廃止とともに使用されなくなった。そして大正12年頃から入札によって建築工事が進められ、大正13年3月31日に竣工したが、現存する友部種羊場建築ということになる。

4. 友部種羊場庁舎の建築的特徴（図4-9）

いつて現存する友部種猪場庁舎の建築的特徴についてみていくことにする。図1の配置図から昭和12年度の時点で旧庁舎は講堂、小使室と接続された建物だったことがわかる。大正13年12月27日の払下げ申請書類には、講堂について「庁舎は連続建物と記載されていることからおそらく移築したと同時に設置された」と推測される。現在は講堂、小使室とともに取り壊されており（図9）、旧庁舎のみが独立して建っている。なお、現存する庁舎の前面には、接続していった通り路の塀が残っており、かつて講堂等が連続していたことを裏付けていた。

木造二階建ての友部種猪場庁舎は、下見板張り（板を重ねにしたイギリス式）の簡素な外観が特徴的で、アーバー・アリサン様式に分類される建物である。古文書（図2・3）から、下見板には移築当初からペンで塗られており、木目をそのまま生かした外観になっていることがわかる。窓は白いペンで塗られており、木目を裏から見える。正面・東側に取り付けられた窓は、上げ下げ窓になっている。長方形を基調としている（高さ1300mm、幅600mmが標準的なサイズ）。

玄関ボックスは、車寄せのあった洋風の意匠になっており、正面からも階建入である形式となっているが、車寄せ部分には左右対称のスロープがつけられている。柱には簡素な装飾の柄がつり下げられているほか、ベッテルも地味な木材で仕上げられている（図6）。

屋根は、入し妻を直交する長形を基調として造られており、横の妻面の角を少し折り半切妻になっている。正面に向って左側妻妻入、右側妻入に出来ており、左右妻の屋根の屋根は高低差5m（幅約5.5m）と急角度で大きく下がられている。この面が面が当初からそのかたちで下がられていたかどうかは検討の余地が残されているが、小屋裏の改築の痕跡が増えられていないことから少なくなとも改築後は変更されていないと推定される。現在、屋根材にはセメント瓦が用いられているが、当初は天然スレートであった。

屋根は、屋根の形状に応じて複雑に組み合わされているが、基本的な構造は和小屋であり、トラスは組まれていない（図8）。小屋裏の梁か東に、墨で番付が記されており、移築した建物であることを裏付けていている。天井はすべて吊り天井になっており、梁に取り付けられた吊索で支えている。

1階部分の平面は、間口（東西）6間、奥行（南北）7間の長方形となっている。玄関は中央にあるとホールの右側が階段となっており、左側は2間半×2間半の食堂となっている。ホールの奥は中央に1間幅の中軒下が設けられており、東側に2間半×2間、2間半×3間の2室が南北に並んでいる。北側の部屋には受付窓の小窓が設けられている。一方、西側は中軒下からつながる広い内部空間となっているが、痕跡からもともとは間仕切りがあったことがわかり。また天井に残された痕跡から、ある階段では西側の広い空間の中央部分に通路を設け、南北に分けて使用していたものと推定される（図8点線）。

2階部分は、1字型の平面構成となっており、階段をあがって東、西側の3部屋に分かれている。東側が2間半×2間の間仕切の室となっている。西側は2間半×2間の部屋となっている。北側の部屋は、3間×4間の最上層の部屋であり、開口部にはペラパン様式が取り入れられている。ペラパンは幅が1間半と広くとられており、現在は窓が入れられているが、建物当初は手すりだけの吹きさらしにしていたことが古文書や痕跡から確認される。

室内的天井および壁面は、1階、2階ともに塗装塗で、床は漆喰板敷になっている（1階の北側部屋は塗装塗だが塗装が落ちており、ベニヤ板で補修）。

1階の玄関から入って右手の2室と、2階の北側、西側の2室には収納が張られている。また階段の手すりは、四角と短冊を組み込んだけの簡素な意匠となっており、この素朴な庁舎の印象をそのまま残してくれる。基盤としては、大谷石が使われているが、築立ててになっている。建物の上部はiomとおりで、構造上の意味を持っていない。

当初からどこかに換気口を空けようとする施設がなされており、これが写真（図9）から確認されるが、それは現在まで変わっていない。

5. やわりに

現存する友部種猪場庁舎は、大正8年11月6日に着工した旧北条種羊場の事務所建築を移築したもので、大正13年3月31日に竣工した建物である。この庁舎建築は、木目をそのまま見せた下見板、簡素な意匠の玄関ボーテ及び内装、「素朴さ」が特徴的なアーバー・アリサン様式である。現在も昭和30年代の建物が残されているものの、庁舎自体の建築構造は、屋根を葺き替えたかほんたには移築当初とほとんど変わっておらず、大正期に移築された種羊場庁舎のすがたを

図10 東日本大震災後の宮内庁の提案状況

2011年12月2日筆者撮影

1105
いまに伝えている。ただ、平成12年に茨城県畜産試験場は新治郡八郷町（現石岡市）に移転されており、現存、手入れのゆきとがなくな
った旧茨城県亀田試験場は天井の漆喰が一部剥がれたなど老朽化が進んでいる。
そしてさらに東日本大震災の被害を受けたことにより、少なくら
ず建物の損傷が認められる（図10）。特に天井の漆喰が各室で部分的に
崩壊しており、利用性に関しては安全性を含めて課題が多い。

冒頭で述べたように、近代日本の篠釉事業は、第一次世界大戦後
のわずかな期間に全国的な重要がみられず、すぐに収束し、国立種羊
倉場と改称した旧天野種羊倉場においてのみ継続されることになった。
昭和4年に再建された旧天野種羊倉場倉舎が取り壊された現在では、友部
種羊倉庫は、篠釉事業導入における唯一の遺構である可能性が高い。
一方、畜産関係の文化財に目を向けた見本でも、指定物件はもちろ
ら登録有形文化財に登録されている牧場等非常に少ない32管見の
かぎりであるが、明治大正に建てられた農事農業の洋式農業建築に
は、アメリカ・アメリカン様式の建物が多く推奨される。同省内の
建築技術者の発表や農業建築書の所も含めて、その系譜を明らか
することは、今後の近代建築史に残された課題といってよい33。本稿
は、友部種羊倉庫を対象にしたのちの事例報告にすぎず、その
一端を担うものとして位置づけざるをえない。

以上から友部種羊倉庫は、「旧茨城県畜産試験場保管文書」（茨
城県歴史資料館所蔵）も含め日本の畜産史を理解する上で貴重な遺構
として評価されるものであり、早急な保存措置が望まれる。

謝辞
本研究の調査にあたって茨城県文化課の藤田雅一氏、村田浩治氏に
は大変お世話になった。また現地調査にあたって茨城大学大学院環境
科学研究科大学院生、同大学院生の助力を得ている。ここに記して
感謝申し上げます。

補注
1）通商産業省「月次牛乳製造関係者（明治39年）・牛乳製造関係者（昭和4年）
　について」（日本建築学会北海道支部研究報告N26p. pp. 89-92, 1989.3）。
2）例えば、中井和之：「農商務者鹿島種羊倉庫のギャラリー形式篠釉倉庫に
　ついて」（日本建築学会技術研究報告第17巻 第35号，pp. 373-378, 2011.2）
　など、一連の研究。
3）茨城県畜産場『茨城県畜産場要覧』（同発行、昭和4年10月）ほか各年度
　版を主参考として使用する。本文文末における出所は、大正15年版、昭
　和4年版、昭和12年版である。
4）『茨城県の近代化遺産～茨城県近代化遺産（建造物等）総合報告書』
　茨城県教育委員会，2007.3，pp. 262-265，
5）友部種羊倉庫の保存に関する文書の一部は茨城県畜産試験場の歩み・篠釉
　倉庫編（茨城県畜産試験場，1964）に寫しが掲載されており、同書もあわ
　せて参照することに。
6）友部種羊倉庫に勤務していた岡本正行の回顧録（岡本正行「篠釉倉庫芸術
　の二」友部の倉庫（1）（日本篠釉倉庫）33号，pp. 11-16，1950.10）
　によれば、「篠釉倉庫は当然篠釉倉庫のものであるが為、篠釉倉庫
　の篠釉倉庫と称す」という記述があるから、篠釉倉庫の篠釉倉庫
　の篠釉倉庫の篠釉倉庫と称すが語られる可能性がある。
7）表2から読み取られた地域の総合数は、1239、35 P値だったことがわかる（サ
　イロイは含まれます）。茨城県畜産倉庫『茨城県畜産場要覧』（昭和4年10月発行，
　p. 3）では総数3355余坪（同表1672余坪）であった。当時、軽倉、閾倉
　が2倉だったのでそれよって計に欠陥が含まれていることが。
8）「官報」（第一七三号、大正7年7月7日）。
9）岡本正行「篠釉倉庫芸術の二」友部の倉庫（1）（日本篠釉倉庫）33号，pp. 11-16，1950.10。
　岡本正行は1919年4月末から友部種羊倉庫
　に勤務しており、同資料は回顧録としてまとめられたものである。
10）岡本正行「篠釉倉庫芸術の二」友部の倉庫（1）pp.11-12，
11）岡本正行「篠釉倉庫芸術の二」友部の倉庫（1）pp.11-12，